

活動報告書

報告日付:2020年5月8日

事業ID:2018490217

事業名:大阪府箕面市における第三の居場所の運営

団体名:特定非営利活動法人 トイボックス

事業完了日:2020年3月31日

1.事業内容(実績。700文字以内):

1.第三の居場所の運営

(1)日時:2019年4月1日~2020年3月31日

(2)場所:大阪府箕面市

(3)内容:「家でも学校でもない第三の居場所」をつくり、そこで社会的相続を補完する。拠点にはスクールソーシャルワーカーや臨床心理士等の専門スキルを備えたスタッフを配置し、子どもとの1対1の関係を重視しながら、子どもたちの生活習慣形成や学ぶ意欲向上を支援する。

2.事業内容詳細:

対象世帯に該当する小学生を対象に、放課後から夜の20時までの時間を利用して、学習支援事業、居場所づくり事業、食事の提供、体験型学習の機会提供、非認知能力の育成、メンタルケア事業をおこなう。また、保護者の相談事業や保護者にとっての居場所の役割も担う。学校や各種関係機関との会議、ケース会にも参加し、家庭の課題や一人ひとりの子ども達の特性を踏まえ、きめ細やかな支援体制を構築している。

3.契約時事業目標の達成状況:

【助成契約書記載の目標】

- ① 拠点利用児童の募集
- ② 上記の登録児童を、行政・学校からの被紹介者や公的扶助の受給世帯等、特に支援が必要な家庭の児童とする
- ③ 児童への居場所、読み聞かせ、学習支援、食事などの安定的な提供
- ④ 運営へのボランティアの参加による持続性の向上

【目標の達成状況】

①② の達成状況…

箕面市教育委員会、対象小学校との連携のもと、児童募集をおこなった。2019年9月末時点で中間目標を達成した。行政の窓口でのチラシ手渡しや就学援助家庭への学校配布資料へのチラシ同封など、②の内容に沿った要支援家庭へのアプローチを行ったため、利用中の全児童が対象世帯に該当し、拠点利用料は無料である。

③ の達成状況…全開所日において実施した。

学習支援では子どもたちが宿題に取り組みやすい環境や、モチベーションアップにつながる工夫を施し、通所し始めの頃には日々の課題をこなすことが難しかった子どもたちも今では学習習慣が身につき、自分で見通しを立て、取り組むことができている。

加えて、みのお拠点では子ども達が育むべき非認知能力を、生き抜く力と定義し、その力の育成の

ため、1年目より継続して、豊富な体験の機会を提供する時間を毎日設けてきた。(名称:わくわくたいむ)

毎日異なるジャンルのさまざまな体験に取り組む中で、子どもたちの興味・関心が広がり、自ら「今度わくわくたいむにこんなことをしたい」と提案、企画する子どもも増えてきた。プログラミングなど継続して1つの課題に取り組むことで、集中力の向上や自分で考えチャレンジする力の成長もみられた。また、毎月「カレーDAY」を実施、子どもたちと一緒に調理を行ってきた。1年間で衛生管理の意識、調理器具の扱い、食に対する興味の高まりなどの生活力の向上につながっている。

図1.わくわくたいむの様子「レゴプログラミング」(左) カレーDAY(右)



また、課外活動やイベントにも力を入れた。夏休みの沖縄合同キャンプでは、全国の子どもたちと交流し、自然の中でさまざまなアクティビティを体験し、大きな成長につながった。クリスマスには拠点内でコンサートを開催し、プロの音楽家によるクラシック生演奏を目の前で鑑賞する機会を設けた。保護者の方も見守る中、実際に楽器を触らせてもらったり、演奏家の方々にみんなで用意した工作の花束を渡し感謝を伝えたりと、非常に良い時間をもつことができた。

図2.沖縄合同キャンプの様子



図3.クリスマスコンサートの様子 演奏隊を迎える準備(左) 演奏会当日(右)



年度末に予定していた宿泊イベントも、子どもたちにとっては大きな楽しみであり、かけがえのない経験の場であったが、新型コロナウイルス感染拡大をうけ、今年度は中止とした。計画していた牧場でのファームステイ、命の大切さを学ぶ体験については来年度の実施ができるよう引き続き準備を進めていく。休校期間中には、インターネットを通じて開放された学習・体験コンテンツや、貸し出しを頂いたプログラミング教材MESHを利用して、有意義な時間活用を提案し、学習面のサポートにも力を入れた。

④ の達成状況…今年度は学生、社会人の方合わせて10名以上の方にボランティアとして参加いただくことができた。定期的に通っていただき、来年度も引き続き来ていただくことが決定している。また大学で講義を行い、その受講生のフィールドワークとしてボランティア参加してもらった。こちらも好評を頂き、来年度も継続して行うよう調整中である。さまざまな大人との関わりが子どもたちにとっても大きな経験となっている。

4.事業実施によって得られた成果:

通所以前、通所以後で児童の様子に変化が見られる(宿題の提出率、授業中の態度、暴言やきつい言葉遣いなどの減少)というご意見を引き続き、学校や家庭から頂いている。また、みのお拠点で力を入れている「生き抜く力」育成の点でも、成果が見られている。

通所から3年目となった子どもたちについては、取り組んできたことの蓄積による成長も見られ、保護者の方からも喜びの声を頂いている。

5.成功したこととその要因

申請時の目標に対応するかたちで、成功したこととその要因について記載する。

③子ども支援の充実(子どもの居場所づくり、食事の提供、学習支援、生活習慣支援、非認知能力形成支援):子ども一人ひとりにあった支援計画を作成し、スタッフ全員でアクションプランを共有して、チーム体制で子ども支援をおこなっている。また、非認知能力を育む時間(わくわくたいむ、わくわくプロジェクト、わくわく課外活動)を毎日継続して提供している。

子ども達はさまざまな体験を積み重ねる中で日々成長し、周りを思いやる力、苦手なこともあきらめずやり抜く力を身につけてきている。

要因:子どもたちをサポートするにあたっての理念や運営方針をスタッフ全員で協議したこと、それを踏まえてスタッフの持ち味を考慮しながらそれぞれの役割分担を明確にしたこと、また、日々の様々な会議の目的を明確にしたことが挙げられる。

④ボランティアスタッフの参加による運営の持続性向上:多数のボランティアの方とのつながりを持つことができ、定期的かつ持続的に子どもたちに関わっていただくことができた。

要因:拠点運営の目的や意義をしっかりと共有し、ボランティアの方々にとって過ごしやすい環境となるようできる限りのサポートを行ったことで、継続して通っていただくことができた。また大学と連携し、学生にとっても学びの場となるような活動内容を提供し、安定してボランティア参加してもらえる仕組みを構築した。

6.失敗したこととその要因

① 拠点利用児童の募集:

要因:1~3年生の児童をもつ対象家庭へさまざまなアプローチを行ったが、結果を得ることができなかった。今後は市と連携し、就学前の段階から支援が必要な家庭へチラシを配布するなど、低学年募集のための策を講じていきたい。

7.活動を通じて明らかになった新たな課題と対応案:

3年目を迎えるにあたり、対象年齢を超えた4、5年生の子どもたちが増えた。今年度は新6年生を卒所とすることで定員人数の調整を行うこととなった。拠点で過ごすことで成長した子どもたちではあるが、まだまだ課題感の強いご家庭もあり、今までの「ほっと一息つける居場所」を突然失うことになる子どもたちをどのようにサポートし、巣立ちを後押ししながらも見守る体制を構築していくのが、今後の課題になる。地域のさまざまな機関と連携できている強みを生かし、拠点を離れた後も子どもたちが安心して成長できるような体制を考えていきたい。

事業成果物:

【成果物の名称】事業完了報告書

【成果物がアップロードされているCANPANのURL】